

現代日本語の可能表現に関する研究  
——一段動詞及び「来る」を中心に——

張麗



# 目次

表一覧 .....	8
図一覧 .....	10

## 0. 序

0.1. 本書の目的 .....	11
0.2. 構成と用語 .....	15
0.2.1. 構成 .....	15
0.2.2. 用語 .....	17

## 第1章 現代日本語のラ抜き形についての先行研究

1.1. はじめに .....	19
1.2. ラ抜き形の発生時期及び発生地域 .....	19
1.3. ラ抜き形の生成の歴史 .....	23
1.4. 今日における使用傾向及び意識調査 .....	25
1.5. 先行研究の論点別整理 .....	28
1.5.1. 質問紙調査と実例調査 .....	28
1.5.1.1. 質問紙調査 .....	28
1.5.1.2. 実例調査 .....	29
1.5.2. 動詞の種類 .....	33
1.5.3. 形態的特徴 .....	35
1.5.4. 構文中の位置 .....	36
1.5.5. 可能の意味の下位類 .....	37

1.5.6. 評価的表現 .....	41
1.5.7. 言語外の特徴 .....	43
1.6. 今日の研究に求められること .....	48

## 第2章 問題提起及び本書の立場

2.1. 問題提起及び本書の立場 .....	52
2.2. 調査項目 .....	53
2.3. データ .....	55
2.3.1. 除外例について.....	56
2.3.2. インターネット上のクチコミデータ .....	59
2.3.2.1. 調査対象.....	62
2.3.2.2. 検索方法.....	63
2.3.2.3. 分析方法及び分析項目.....	63
2.3.3. 「Yahoo!知恵袋」 .....	66
2.3.3.1. 調査対象 .....	67
2.3.3.2. 検索方法 .....	67
2.3.3.3. 分析方法及び分析項目 .....	70
2.3.4. 漫画の実例データ .....	73
2.3.4.1. 調査対象 .....	74
2.3.4.2. 用例の収集方法 .....	74
2.3.4.3. 分析方法及び分析項目 .....	75
2.4. 統計処理について .....	77

## 第3章 先行研究における論点の検証

3.1. はじめに .....	80
-----------------	----

3.2. 結果及び考察 .....	80
3.2.1. 「①言語外的要因」 .....	80
3.2.1.1. 「①-1話者の年齢」 .....	81
3.2.1.2. 「①-2話者の性別」 .....	88
3.2.1.3. 「①-3場面・対人関係」 .....	90
3.2.2. 「②動詞の種類」 .....	96
3.2.2.1. 「②-1動詞の語尾を除いた語幹音節数はいくつか」 .....	97
3.2.2.2. 「②-2元になる動詞は上一段動詞か、下一段動詞か、力変動詞か」 ...	107
3.2.2.3. 「②-3複合動詞、補助動詞のラ抜き形が使用されているか否か」 ...	116
3.2.3. 「③肯定形か、否定形か」 .....	124
3.2.4. 「④主節か、従属節か」 .....	133
3.3. まとめ .....	141

## 第4章 意味の違いと可能形式の使い分け

4.1. はじめに .....	148
4.2. 可能と意図成就という観点 .....	148
4.3. 可能か、意図成就か .....	148
4.4. まとめ .....	158

## 第5章 評価的表現との関係

5.1. はじめに .....	161
5.2. 評価的表現 .....	162
5.3. 構文中の位置と評価的表現との関係 .....	165
5.3.1. 構文中の位置 .....	165
5.3.2. 評価的表現との共起関係の有無 .....	176

5.4. まとめ.....	185
---------------	-----

## 第6章 個別用法

6.1. データごとの個別用法.....	187
6.1.1. インターネット上のクチコミデータ（データAとデータB）.....	187
6.1.1.1. データAの個別用法.....	187
6.1.1.2. データB.....	199
6.1.2. 「Yahoo!知恵袋」.....	223
6.1.3. 漫画の実例データ.....	244
6.2. データごとの個別用法のまとめ.....	256
6.2.1. インターネット上のクチコミデータ（データAとデータB）.....	256
6.2.1.1. データAの個別用法のまとめ.....	256
6.2.1.2. データB.....	258
6.2.2. 「Yahoo!知恵袋」.....	261
6.2.3. 漫画の実例データ.....	264
6.3. まとめ.....	267

## 第7章 結論

7.1. はじめに.....	270
7.2. 本書のまとめ.....	270
7.2.1. 「①言語外的要因」.....	270
7.2.1.1. 「①-1話者の年齢」.....	270
7.2.1.2. 「①-2話者の性別」.....	271
7.2.1.3. 「①-3場面・対人関係」.....	271
7.2.2. 「②動詞の種類」.....	271
7.2.2.1. 「②-1動詞の語尾を除いた語幹音節数はいくつか」.....	272
7.2.2.2. 「②-2元になる動詞は上一段動詞か、下一段動詞か、力変動詞か」.....	272

7.2.2.3. 「㉔-3複合動詞、補助動詞のラ抜き形が使用されているか否か」	272
7.2.3. 「㉔肯定形か、否定形か」	273
7.2.4. 「㉔主節か、従属節か」	273
7.2.5. 「㉔可能の意味（可能か、意図成就か）」	273
7.2.6. 「㉔構文中の位置（文のどこにあるのか）」	274
7.2.6.1. 構文中の位置	274
7.2.6.2. 文中・文末の個別用法	274
7.2.7. 「㉔評価的表現と共起するか否か」	276
7.3. 本書の学史的位置	276
参考文献	280
付録 言語資料及び出典一覧	287

## 表一覽

表 1-1	「-ar- 抜き」によるラ抜き形の説明	25
表 1-2	社会言語的な観点から見た言語変化のカテゴリー	26
表 2-1	語彙リスト及び検索用の正規表現	68
表 3-1	投稿者の内訳（年齢×性別）（データ A）	81
表 3-2	世代別のラレル形とラ抜き形の使用率の比較（データ A）	82
表 3-3	投稿者の内訳（年齢×性別）	82
表 3-4	各動詞の用例数（年齢×動詞）（データ B）	83
表 3-5	ラレル形の動詞別・世代グループ別使用率（データ B）	84
表 3-6	ラ抜き形の動詞別・世代グループ別使用率（データ B）	85
表 3-7	世代のカイ二乗検定（データ B）	86
表 3-8	年齢 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（データ B）	86
表 3-9	性別のカイ二乗検定（データ A）	88
表 3-10	性別のカイ二乗検定（データ B）	89
表 3-11	内訳（性別）（漫画の実例データ）	89
表 3-12	性別のカイ二乗検定（漫画の実例データ）	90
表 3-13	普通体 / 丁寧体の分布（「Yahoo! 知恵袋」）	91
表 3-14	普通体 / 丁寧体のカイ二乗検定（「Yahoo! 知恵袋」）	91
表 3-15	文体 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（「Yahoo! 知恵袋」）	92
表 3-16	各動詞のラレル形とラ抜き形の内訳（「Yahoo! 知恵袋」）	99
表 3-17	各動詞のラレル形とラ抜き形の内訳（漫画の実例データ）	105
表 3-18	各動詞のラレル形とラ抜き形の活用の分布（データ A）	107
表 3-19	動詞の活用のカイ二乗検定（データ A）	109
表 3-20	活用 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（データ A）	109
表 3-21	活用の種類ごとの用例数及び比率（%）（データ B）	110
表 3-22	活用のカイ二乗検定（データ B）	110
表 3-23	活用 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（データ B）	111
表 3-24	動詞の活用の分布（「Yahoo! 知恵袋」）	112
表 3-25	活用のカイ二乗検定（「Yahoo! 知恵袋」）	112
表 3-26	活用 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（「Yahoo! 知恵袋」）	113
表 3-27	ラレル形とラ抜き形の活用の分布（漫画の実例データ）	114
表 3-28	活用のカイ二乗検定（漫画の実例データ）	114
表 3-29	活用 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（漫画の実例データ）	115
表 3-30	上 / 下二段動詞のカイ二乗検定（漫画の実例データ）	116
表 3-31	複合 / 補助 / 使役動詞の出現率（「Yahoo! 知恵袋」）	117
表 3-32	複合 / 補助動詞の出現率（漫画の実例データ）	121
表 3-33	肯定 / 否定形の分布（データ A）	125
表 3-34	肯定 / 否定形のカイ二乗検定（データ A）	126
表 3-35	肯定 / 否定形 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（データ A）	126
表 3-36	肯定 / 否定形の分布（データ B）	127
表 3-37	肯定 / 否定形のカイ二乗検定（データ B）	128
表 3-38	肯定 / 否定形の分布（「Yahoo! 知恵袋」）	129
表 3-39	肯定 / 否定形のカイ二乗検定（「Yahoo! 知恵袋」）	130
表 3-40	肯定 / 否定形 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（「Yahoo! 知恵袋」）	130
表 3-41	肯定 / 否定形の分布（漫画の実例データ）	131
表 3-42	肯定 / 否定形のカイ二乗検定（漫画の実例データ）	132
表 3-43	肯定 / 否定 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation（漫画データ）	132
表 3-44	主節 / 属節の分布（データ A）	133
表 3-45	主節 / 従属節のカイ二乗検定（データ A）	134
表 3-46	主節 / 従属節の分布（データ B）	135



表 3-47	主節 / 従属節のカイニ乗検定 (データ B)	136
表 3-48	主節 / 従属節 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (データ B)	136
表 3-49	主節と従属節の分布 (「Yahoo! 知恵袋」)	137
表 3-50	主節 / 従属節のカイニ乗検定 (「Yahoo! 知恵袋」)	138
表 3-51	主節 / 従属節の分布 (漫画の実例データ)	139
表 3-52	主節 / 従属節のカイニ乗検定 (漫画の実例データ)	140
表 3-53	主 / 従属節 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (漫画の実例データ)	140
表 3-54	ラ抜き形がラレル形より多く用いられた動詞のリスト	144
表 4-1	ラレル形とラ抜き形の意味用法 (データ A)	149
表 4-2	可能 / 意図成就のカイニ乗検定 (データ A)	150
表 4-3	可能 / 意図成就 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (データ A)	150
表 4-4	ラレル形とラ抜き形の意味用法 (データ B)	151
表 4-5	可能 / 意図成就のカイニ乗検定 (データ B)	152
表 4-6	可能 / 意図成就 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (データ B)	153
表 4-7	ラレル形とラ抜き形の意味用法 (「Yahoo! 知恵袋」)	154
表 4-8	可能 / 意図成就のカイニ乗検定 (「Yahoo! 知恵袋」)	155
表 4-9	可能 / 意図成就 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (「Yahoo! 知恵袋」)	155
表 4-10	ラレル形とラ抜き形の意味用法 (漫画の実例データ)	156
表 4-11	可能 / 意図成就のカイニ乗検定 (漫画の実例データ)	157
表 4-12	可能 / 意図成就 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (漫画の実例データ)	157
表 4-13	意図成就用法の総用例数	159
表 5-1	ラレル形とラ抜き形の構文中の位置 (データ A)	165
表 5-2	ラレル形とラ抜き形の構文中の位置 (データ B)	167
表 5-3	ラレル形とラ抜き形の構文中の位置 (「Yahoo! 知恵袋」)	170
表 5-4	ラレル形とラ抜き形の構文中の位置 (漫画の実例データ)	173
表 5-5	評価的表現との共起の有無 (データ A)	176
表 5-6	評価的表現のカイニ乗検定 (データ A)	177
表 5-7	評価的表現 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (データ A)	178
表 5-8	評価的表現を伴う例の有無 (データ B)	179
表 5-9	評価的表現のカイニ乗検定 (データ B)	180
表 5-10	評価的表現 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (データ B)	180
表 5-11	評価的表現との共起の有無 (「Yahoo! 知恵袋」)	181
表 5-12	評価的表現のカイニ乗検定 (「Yahoo! 知恵袋」)	182
表 5-13	評価的表現 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (「Yahoo! 知恵袋」)	182
表 5-14	評価的表現との共起の有無 (漫画の実例データ)	183
表 5-15	評価的表現のカイニ乗検定 (漫画の実例データ)	184
表 5-16	評価的表現 * ラレル / ラ抜き Crosstabulation (漫画の実例データ)	184
表 6-1	ノ用法	188
表 6-2	名詞後続用法	190
表 6-3	テ用法	193
表 6-4	中止用法	195
表 6-5	「下接形式なし」	197
表 6-6	ノ用法	200
表 6-7	名詞後続用法	203
表 6-8	テ用法	206
表 6-9	ノデ用法	208
表 6-10	ガ用法	211
表 6-11	中止用法	214
表 6-12	「下接形式なし」	216
表 6-13	テイル用法	219
表 6-14	ソウダ用法 (様態)	221

表 6-15	ノ用法	223
表 6-16	名詞後続用法	225
表 6-17	ヨウニ用法	228
表 6-18	ヨウニ用法の再分類	228
表 6-19	テ用法	229
表 6-20	ト用法	232
表 6-21	シ用法	233
表 6-22	ノデ用法	235
表 6-23	下接形式なし	237
表 6-24	ノダ用法	239
表 6-25	カ用法	241
表 6-26	ヨ用法	242
表 6-27	名詞後続用法	244
表 6-28	テ用法	246
表 6-29	シ用法	248
表 6-30	下接形式なし	250
表 6-31	ノダ用法	252
表 6-32	ヨ用法	253
表 6-33	カモシレナイ用法	255
表 6-34	個別用法及び後続する評価的表現の用例の比率 (データ A)	256
表 6-35	個別用法及び後続する評価的表現の用例の比率 (データ B)	259
表 6-36	個別用法及び後続する評価的表現の用例の比率 (「Yahoo! 知恵袋」)	262
表 6-37	各用法及び後続する評価的表現の用例の比率 (漫画の実例データ)	265
表 6-38	ラ抜き形が多く観察された個別用法リスト	267

## 図一覧

図 3-1	ラレル形の動詞別・世代グループ別使用率	84
図 3-2	ラ抜き形の動詞別・世代グループ別使用率	85
図 3-3	世代・聞き手との対人関係によるラ抜き形の用例の分布 (漫画の実例データ)	94
図 3-4	ラレル形とラ抜き形の各活用の種類の出現率 (データ A)	108
図 3-5	肯定形 / 否定形の使用率の比較 (「Yahoo! 知恵袋」)	129
図 3-6	ラ抜き形の使用場面に関する図解	143
図 6-1	意図成就用法で用いられている用例の比率の比較	257
図 6-2	個別用法における意図成就用法と共起する評価的表現の比率	258
図 6-3	意図成就用法で現れている用例の比率の比較	260
図 6-4	個別用法における意図成就用法と共起する評価的表現の比率	261
図 6-5	意図成就用法で現れている用例の比率	264
図 6-6	意図成就用法と共起する評価的表現の比率	264
図 6-7	意図成就用法で現れている用例の比率の比較	266

## 0. 序

本書は、筆者が提出した学位請求論文に増補し、全体に修正・改稿を施したものである。

本書の目的と構成は次のとおりである。

### 0.1. 本書の目的

本書は、一段動詞及びカ行変格動詞「来る」の未然形にレルが接続して可能の意味を表す「ラ抜き形」(例、「見れる」、「来れる」などのいわゆる「ラ抜き言葉」)を考察の対象とし、この形式の表す意味、形態及び構文的特徴などの使用実態を明らかにしようとするものである。なお、ラ抜き形を考察する際には、従来的一段動詞及びカ行変格活用動詞「来る」の未然形にラレルが接続し、可能の意味を表す「ラレル形」(例、「見られる」、「来られる」などのいわゆる規範形)と比較しながら研究する必要があるので、「ラレル形」も本書の研究対象とする。本書の目的では、一段動詞及びカ行変格動詞「来る」の未然形にレルが接続して可能の意味を表す「ラ抜き形」(例、「見れる」、「来れる」などのいわゆる「ラ抜き言葉」)を考察の対象とし、この形式の表す意味、形態及び構文的特徴などの使用実態を明らかにしようとするものである。なお、ラ抜き形を考察する際には、従来的一段動詞及びカ行変格活用動詞「来る」の未然形にラレルが接続し、可能の意味を表す「ラレル形」(例、「見られる」、「来られる」などのいわゆる規範形)と比較しながら研究する必要があるので、「ラレル形」も本書の研究対象とする。

ラ抜き形とラレル形の使用実態に関しては、従来さまざまな調査研究がなされてきた。しかしながら、それが表す意味、動詞の種類、形態的・構文的特徴などについては、後述するように、まだ十分に明らかになっていないとは言い難い。

本書では、先行研究で取り上げられていない2つの観点を導入する。

第一に、「可能」と「意図成就」という意味の違い、第二に評価的表現の有無である。

本書の研究資料の一つであるクチコミデータには、以下のような用例が少なくない。

(1) キラキラしてお花がとてもかわいいです。通常、画面を操作しているときは横から見ることになるので…常にお花を見られないのが残念(笑)イヤホンジャック部分は引っ張ると5ミリくらい自由に動くので抜けないかちょっと心配ですが、根元部分が引っ掛かって今のところ大丈夫そうです。(女性30代)  
<http://review.rakuten.co.jp/search/%E8%A6%8B%E3%82%89%E3%82%8C/-/a3-p6/>

(2) 値段の割に豪華に仕上げていただき、贈り物として恥ずかしくない感じで良かったです(o^^o) 画像も見れたのは安心できてとても良かったですo(^-^o) (女性20代)  
<http://review.rakuten.co.jp/search/見れ/-/a2-p5/>

従来の研究では、可能の意味の下位類である<「能力可能」と「状況可能」>をめぐるラレル形とラ抜き形の使い分けがあるかどうかを考察したものの、加藤(1988)以外、両可能形式の使用傾向の差に可能の意味の違いが関与しないと結論付けている。上記の2つの例は、いずれも可能表現が用いられていて、従来の広義的可能の意味分類で分析すると、どれも可能の意味で、肯定形か否定形かという違いだけのようである。

しかし、本書では、尾上(1998, 1999, 2003)の説に従って、従来の広義的可能を可能用法と意図成就用法とに分けて考える。例(1)の「見られない」は、「意図した行為が実現しなかった」という意味を表し、例(2)の「見れた」は、「意図した行為が実現した」という意味を表す。すなわち、例(1)は「意志的行為の不実現」の場合であって、可能用法であるのに対し、(2)は「意志的行為の実現」の意味で、意図成就用法である。

筆者の収集した実例からは、ラレル形は意図成就用法よりも可能用法でラ抜き形は可能用法よりも意図成就用法でより多く用いられている印象を受ける。しかし、このような観点で両者の使い分けを検討した研究はない。

また、上記の2つの用例の中には、「残念」「とても良かったです」という「マイナス」或は「プラス」評価的表現が後続している。収集した用例の中には上記の2つの「意志的行為の実現 / 不実現」の文の多くは文末に「とても良かった」或は「残念です」というような「評価的表現」との共起関係が見られるようである。

次のような例も多く見られた。

(3) 今回は33階の羽田空港側のお部屋でした。夕日と朝日が見れて良かったです。夜景を満喫しました。良い部屋で大満足です。(女性40代) [http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD\\_340595.html](http://www.jalan.net/kuchikomi/YAD_340595.html)

(4) 近所のSCで一目惚れし、安さにびっくりしてこちらで購入させていただきました。プレゼントとして購入したのですが、ラッピングもしてただけで助かりました。実物が見られなくて残念です。(女性30代)  
<http://review.rakuten.co.jp/search/%E8%A6%8B%E3%82%89%E3%82%8C/-/a3-p8/>

例(3)、例(4)が例(1)、(2)と違うところは、(1)と(2)が<可能表現+ノ+評価的表現>という構成であるのに対して、(3)と(4)が可能表現の「見れ」と「見られなく」の後にいずれもテ形が接続しており、いずれも<可能表現+テ+評価的表現>という構成を取っていることである。また、例(3)の「見れ」は「意志的行為の実現」の意味で、意図成就用法であるのに対し、例(4)の「見られなく」は「意志的行為の不実現」の場合であって、可能用法である。これらのテ形が用いられた文の文末には「評価的表現」も多く見られるようである。

(1) (2) のように<可能表現+ノ+評価的表現>という構成を取っている例、及び (3) (4) のように<可能表現+テ+評価的表現>という構成を取っている例は、ラレル形とラ抜き形を問わず、それぞれ非常に多く現れている。それらの用例を見ると、用例 (1) (2) のような構文においては、ラ抜き形が意図成就用法で用いられやすく、評価的表現を伴う傾向があり、ラレル形が可能用法で用いられやすく、評価的表現を伴う傾向があるように思われる。また、用例 (3) (4) のような構文においても、ラ抜き形が意図成就用法で用いられやすく、評価的表現を伴いやすい傾向があり、ラレル形が可能用法で用いられやすく、評価的表現を伴いやすい傾向があるように思われる。

しかしながら、これらの観点については従来の先行研究ではまったく注目されていないし、実証的に考察した研究はなかった。このようなことを明らかにするためには、様々なジャンルのデータを用いて、ラ抜き形の形態・構文をめぐる使用傾向を考察する必要がある。

上記の観点以外にも、ラ抜き形とラレル形の使用上の差異をめぐるさまざまな提起されてきた先行研究の諸観点を検証することも研究の目的としたい。

さて、上記の様々な研究目的をただ一つの研究資料によって果たすことは極めて困難である。従って、本書は、インターネット上のクチコミデータ、「Yahoo 知恵袋」(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」モニター公開データ (2009 年度版))、2000 年以降に出版された漫画作品から収集したデータ、という 3 種類のデータを研究資料とする。

以上、本書は、量的研究及び質的研究を通じて、先行研究の諸研究の主張を検証するとともに、可能形式の使用傾向の差と両形式の意味の違い、形態的・構文的特徴との関係を含む使用実態を明らかにすることを目的とする。

## 0.2. 構成と用語

### 0.2.1. 構成

本書は7つの章から構成される。

第1章では、先行研究をまとめる。「1.2～1.4」で、ラ抜き形の発生時期、発生地域、生成の歴史を整理した上で、今日におけるラ抜き形の使用傾向及びその使用に関する意識調査をまとめる。「1.5. 先行研究の論点別整理」では、これまでのラ抜き形に関する先行研究を論点別に整理し、問題点を指摘する。先行研究では、可能と意図成就という意味の違い、及び評価的表現との共起関係の有無という2つの観点が欠けている。1.5節で可能の意味の下位類である可能用法と意図成就用法について例を挙げながら説明し、ラ抜き形の研究に可能用法・意図成就用法という意味の違いや、構文中の位置及び後続する評価的表現との共起関係の有無に注目する必要性についても述べる。「1.6 今日の研究に求められること」では、ラ抜き形について今後どのような調査研究が必要なのかを述べる。

第2章では、「2.1. 問題提起及び本書の立場」で今日要請されるラ抜き形の研究をまとめる。「2.2. 調査項目」で、本書の調査項目を述べる。「2.3. データ」で本書で用いる3種類のデータについて、その必要性は何か、それぞれのデータを利用する場合の調査研究の目的は何か、各データのメリットとデメリットは何か、さらに、それぞれのデータについて、調査対象、検索方法、分析項目は何か、などについて述べる。「2.4. 統計処理について」で、データを計量的に集計する場合にどのような統計処理の手法を用いるかを述べる。

第3章では、先行研究における論点を検証する。「3.1. はじめに」で、本章で検証する項目を挙げる。「3.2. 結果及び考察」で、3種類のデータに基づいて検証した結果をそれぞれ報告し、考察する。

第4章では、ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差と両形式の表す意味の違いと関係があるか否かを考察した結果を報告し、考察する。「4.1. はじめに」で、第4章の研究目的、分析項目を述べる。「4.2. 可能と意図成就という観点」で、可能と意図成就の定義について説明する。その後、本

書で可能と意図成就という観点を取り上げる必要性について説明する。「4.3. 可能か、意図成就か」で、3種類のデータに基づいて、ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差に可能と意図成就の意味の違いが関与するか否かを調査した結果を報告し、考察する。「4.4. まとめ」で、データごとの結果をまとめて報告する。

第5章では、ラレル形とラ抜き形の使用傾向の差と後続する評価的表現との共起関係の有無との関係について述べる。「5.1. はじめに」で、第5章の研究目的及び分析項目を述べる。「5.2. 評価的表現」で、評価的表現について用例を挙げながら説明する。さらに、なぜ本書では、評価的表現との共起関係の有無に注目する必要があるのかを説明する。「5.3. 構文中の位置と評価的表現との関係」では、まず、「5.3.1. 構文中の位置」で3種類のデータに基づいて、ラレル形とラ抜き形がそれぞれ文のどこに現れやすいかを調査した結果を報告する。それから、「5.3.2. 評価的表現との共起関係の有無」で3種類のデータに基づいて、それぞれ文中・文末に出現しているラレル形とラ抜き形のどちらが評価的表現と共起しやすいかを調査し、統計分析を行い、結果を報告する。「5.4. まとめ」で、3種類のデータに基づいた調査の結果をまとめる。

第6章では、文中・文末各用法について個別分析をする。「6.1.1. インターネット上のクチコミデータ(データAとデータB)」ではインターネット上のクチコミデータに基づいて調査したラレル形とラ抜き形の文中・文末において多く用いられている用法をまとめた上で、ラレル形とラ抜き形の当該用法においてそれぞれの形態(肯定か否定か)、意味(可能か意図成就か)、評価的表現との共起関係の有無、の3つの項目における出現率を集計し報告する。「6.1.2. 「Yahoo! 知恵袋」」では、「Yahoo! 知恵袋」データに基づいて調査した。「6.1.1.」と同様の分析を行う。「6.1.3. 漫画の実例データ」では、漫画の実例データに基づいてやはり同様の分析を行う。「6.2. データごとの個別用法のまとめ」で個別用法と可能、意図成就、評価的表現との共起関係の有無との関係をまとめる。

第7章では、分析項目に従って、本書の結論をまとめた上で、研究史的な流れの中で本書が占める位置を確認する。また、可能と意図成就とい



う意味の違い、形態（肯定 / 否定）、構文中の位置、評価的表現との共起関係の有無の4つの観点を組み合わせて実証的に考察することの意義を述べる。

### 0.2.2. 用語

本書では、従来のいわゆる「ら抜きことば」を可能動詞の一種として認めた上で、「見れる」「来れる」などの形式が用いられる動詞の語彙や動詞の形態、さらにそれが用いられた文まで研究対象とするので、便宜上、これらの形式をすべてラ抜き形と呼ぶこととし、従来の「見られる」「来られる」をラレル形と呼ぶこととする。



## 第1章

# 現代日本語のラ抜き形についての先行研究

## 1.1. はじめに

「見れる」「来れる」などのラ抜き形（いわゆる「ラ抜き言葉」）は、大正末期から昭和初期にかけて、方言から始まって、徐々に広がってきた（井上 1998）。こうした用法は規範的な言い方「見られる」「来られる」と違うため批判されていたが、話し言葉の表現として特に若者の間ですでに定着していて、その使用は中・高年層まで広がっている。井上・宇佐美(1997)は、ラ抜き形の使用が今後も更に拡大する可能性（p.65）を指摘している。本章では、「見れる」「起きれる」「来れる」などのラ抜き形（いわゆる「ラ抜き言葉」）に関する従来の研究を概観する。

## 1.2. ラ抜き形の発生時期及び発生地域

ラ抜き形の発生時期について、もっとも早く記録されたのは昭和初期である（井上 1998:13）。中村（1953）では、昭和3年ごろ東京の山の手の高校生のことばとして「来れない」「見れない」などの言い方が使われていたことに気付いた（p.591）と記述している。筆者の管見の限りでは、この記述は東京でのラ抜き形の使用に関する最も早いものである。なお、松下（1924）では、ラ抜き形について、「被動の助辞「られる」の「ら」を省略して用ゐるのは「起きられる」「受けられる」「来られる」を略して「起きれる」「受けれる」「来れる」といふ類だ。上一段、下一段、力行変格皆そうなるが平易な説話にのみ用ゐる厳粛な説話には用ゐない」と記述し、「病気では来れまい。」（p.330）という例も挙げている。この記述から、当時ラ抜き形は話し言葉を中心として使用されていたことが分かる。なお、上記の中村（1953）と松下（1924）の記述はいずれも共通語としてのラ抜き形に関する記述である。

方言としてのラ抜き形の使用に関する記述はもっと早い時期のものがあると思われる。

静岡県出身の文法学者松下大三郎が明治30年（1897年）に書いた『遠江文典』においては、「東京にて四段以外にはラレルを附して、逃ゲラレル、

受ケラレルなどいへど、遠江にては斯くいふときは受動と混ずることあり。ラレルをつめてレルといふ、逃ゲラレル、受ケラレル、を逃ゲレル、受ケレル、といふなり。」(p.8)と記述している。

なお、『遠江文典』が明治30年に書かれていたということから、ラ抜き形が静岡県では明治時代に用いられていたことが分かる。

また山形県鶴岡市出身の文法学者三矢重松(明治4年(1871年)生まれ)も、故郷の方言では上下一段動詞及びカ変動詞の可能形について、「上下一段カ變の被役形のラを略す」、「起きられる」「受けられる」「来られる」を「起きれる」「受けれる」「来れる」と言う、と記述している(三矢1930:23)。このことから、ラ抜き形は東北地方では明治時代には用いられていたようである。

さらに、国立国語研究所の『方言文法全国地図』の準備調査資料により、ほぼ明治時代生まれの回答者のラ抜き形の使用の分布が分かる。その結果によると、ラ抜き形は北海道と中部地方、中国・四国地方などに分かれて使用されていた(p.4)ようである。

なお、文学作品に現れたラ抜き形として、方言が現れたものと考えべきいくつかの用例を以下に掲げる。

大正期の葛西善蔵の作品に使用されているラ抜き形の用例を8例掲げておく。

- (5) 何故貴様は、俺が実際に乞食をし廻るまで黙つて随いて来れないのか！(第一巻兄と弟 大正7年4月 七、216・8 会)<sup>1</sup>
- (6) 兎に角一勉強するつもりで出かけて行つて、満足に歸つて来ればこの上無し、(略)(第三巻落葉のやうに 大正13年5月一、72・4 地)
- (7) 「お前がどこまでもさうして赤んぼなぞ背負つて追かけて来るやうだと、今度はお前なぞの来れないやうな、樺太の方へでも行つちまふよ」(第三巻 もぐる 大正15年1月 282・9 会)

1 「会」は会話文のことを指し、「地」は地の文のことを指す。